

# 渦巻文様のある聖なる壺

時代：弥生時代中期

調査名：唐古・鍵遺跡 第48次調査

発見年：1991年

大きさ：残存高 31.0 cm、胴部径 25.0 cm

渦巻文様は世界各地にみられる文様で、特に原始・古代においては神聖視されていることが多い文様です。アイルランドの墳丘墓（ニューグレンジ）の石、クレタ島クノッソス宮殿の壁画など地域・時代を超えて用いられる普遍的な文様のひとつです。日本においても縄文土器や土偶、弥生時代の祭器である銅鐸にも渦巻文様が描かれており、特別な文様として扱われています。

さて、今回の渦巻文様のある弥生土器は、口縁部が欠失していますが、本来は口縁部が直立する形態の「短頸壺<sup>たんけいつぼ</sup>」と呼ばれる土器です。この形態の土器は、口縁部に注ぎ口が作られているものがあり、「水壺」的な用途が考えられます。また、この短頸壺は、弥生時代中期後半に多く見られると共に絵画も多く描かれるという特徴をもっています。

今回の短頸壺では絵画でなく、その代わりに左右に渦が巻く「双頭渦文<sup>そうとううずもん</sup>」で、胴部上半の全面にスタンプされています。このスタンプ文様は、タタキ板に文様を彫り込み、土器表面を何回も叩いた結果、付けられたもので重複しわかりにくくなっています。

このことは、この渦巻文を第三者に見せるためにスタンプしたのでなく、渦巻文を短頸壺に封じ込める意図があったのではないのでしょうか。それは、水壺に邪気<sup>じゃき</sup>を祓<sup>はら</sup>う渦巻文様を施して封じ（叩き）込めることによって、「聖なる壺」としたのでしょう。

